【活動報告】

クリニクラウンに関する勉強会＆ワークショップ

上方文化笑学センター所員・社会学部　横田　　修

2025 年 10 月 24 日（金）、上方文化笑学センターは「クリニクラウンに関する勉強会＆ワークショップ」を開催した。クリニクラウンとは、入院生活を送るこどもの病棟を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、こどもたちの笑顔を育む道化師のことである。

当日は、認定 NPO 法人日本クリニクラウン協会（JCCA）事務局長の熊谷恵利子氏を講師に迎え、日頃の活動について話を伺った。また後半には、実際の活動を模したワークショップを通して、その役割や技術について理解を深めた。参加者は体を動かしながら体験し、会場は笑いに包まれた。

まずはクリニクラウン活動についての報告である。熊谷氏は、スポンジでできた「赤い鼻」を付けて登壇した。会場の空気が一瞬で和らぐ中、こどもたちに語りかけるような柔らかい口調で講演が始まった。

図 1　熊谷氏登場

1. 冒頭のメッセージ：「寄り道」を楽しむ心

冒頭、本日の目標として「寄り道を楽しむ」というお題が出された。レジュメにある A と B の二点を結ぶ際、「真っ直ぐ引くのではなく、寄り道をして、できる限り時間がかかるような線を描いてほしい」と熊谷氏は言う。

「最近は効率化やコストパフォーマンスといった言葉がよく使われます。しかし、少し寄り道をしたり、いつもと違う道を通ったりすることで、新しいワクワクを見つけることもあるのではないでしょうか」。この呼びかけは、参加者の心を日常の「効率」から解き放つ決意表明となった。

2. クリニクラウンの歩みと役割

「クリニクラウン（CliniClown）」とは、Clinic（病院）と Clown（道化師）を合わせた造語で、「臨床道化師」とも訳される。日本での歴史は 2004 年に遡り、2005 年に日本クリニクラウン協会（JCCA）が設立された。

JCCA は「すべてのこどもにこども時間を」を合言葉に活動している。入院中のこどもたちは、治療への不安の中で「こどもらしく過ごす」ことが難しい状況にある。クリニクラウンは、単なる慰問ではなく医療チームの一員として、こどもたちが本来持っている「生きる力」を取り戻す手助けをしている。現在は全国で 39 名のクリニクラウンが活動しており、プロのエンターテイナーから会社員、医療・福祉従事者まで、多様な背景を持つメンバーがその役割を担っている。

3.「完璧さ」よりも大切な「気づき」のスキル

熊谷氏は「声」と「気づき」の大切さについて語った。声のトーンが場にもたらす影響は非常に大きい一方、常に完璧でいることの難しさにも触れた。事務作業中に素っ気ない態度をとってしまう自分を認めつつも、その瞬間に「しまった」と気づき、あとで声をかけ直す。完璧を目指すのではなく、自分の心の動きに敏感であること。その「気づき」こそが、こどもと向き合う上で何より大切であるというメッセージは参加者の心に深く響いた。

4.「笑顔」から「こども時間」へ

発足当初の「入院中のこどもに笑顔を」というスローガンは、後に「すべてのこどもにこども時間を」へと改められた。「本当にしんどいとき、人は笑顔になれない。笑顔にはパワーが必要なのだ」とこどもたちから教わったからである。

脳性まひなどの疾患で表情を動かせないこどもも、心の中は自由で、さまざまなことを感じている。また、周囲を慮って「頑張って笑顔を作っている」こどもたちもいる。そんなこどもたちの健気さと葛藤を、大人は知っておかなければならない。点滴や行動制限のある入院生活の中で、いたずらっ子の表情を見せたり、何かに驚いたりする「ワクワク、ドキドキする時間」を取り戻すこと。それこそが、JCCA が大切にしている「こども時間」の本質なのだ。

5.「どうしたらできるか」――コロナ禍での挑戦

新型コロナウイルスの感染拡大は病院訪問という活動フィールドを奪ったが、協会は「オンライン訪問」という新たな一歩を踏み出した。「できるか、できないか」ではなく「どうしたらできるか」を考える。これは、協会のメンバーがこどもたちから教わってきた姿勢であった。

かつて、反応が乏しいことを理由に訪問を断られそうになった病室で、クリニクラウンの奏でる音に合わせてこどもの足が動いたことがあったという。それを「反射」と片付けるのではなく、「一緒にダンスしているんだね」とユーモアで包み込む。想像力さえあれば、病室は海にもなり、どこへでも行ける。「遊びの無限の可能性」を信じる姿勢が、コロナ禍においても活動を支えたそうだ。

6. めいちゃんが教えてくれた「伝えること」の力

活動の存続に悩んでいた時期、背中を押したのは、5歳で亡くなった「めいちゃん」からの手紙であった。動画で紹介されたその手紙には、亡くなる直前まで会いたかったという想いと、真っ直ぐな「ありがとう」の言葉が綴られていた。

「想いは言葉にして伝えないと届きません。そして受け取った人にとって、その言葉は大きな生きる力になる」。熊谷氏は、身近な人への感謝を口にすることの大切さを、会場へ静かに語りかけた。

7. クリニクラウンが体現する「人間らしさ」

ワークショップを前に、熊谷氏は「なぜクリニクラウンなのか」という問いへの答えをこう締めくくった。「クリニクラウンは、自由な発想を持ち、喜びを素直に表現します。同時に、失敗やためらい、嫉妬といった人間の『欠点』とされる部分も隠さずオープンにします。だからこそ、人は共感し、自分を肯定できるのではないでしょうか」。底抜けに前向きな姿に触れたところで、いよいよワークショップへと移った。

8. ユーモア・コミュニケーションへの挑戦

講演に続き、後半は参加者全員が円になり、実際のクリニクラウンの視点を体感するワークを行った。まず行われたウォーミングアップでは、表情筋をほぐしながら、自分の立ち位置や距離感（ノンバーバル・コミュニケーション）が、言葉以上に自分自身の状態を発信していることに気づかされた。

図2　ワーク開始

9.「うまくいかないこと」を面白がる

「拍手回し」や「ぴよんゲーム」では、アイコンタクトの重要性が強調された。視線を交わすことで「あなたに伝えている」という意志を明確にしていく。しかし、ルールが複雑になるほどハプニングや失敗が相次ぐ。そこで熊谷氏は、「コミュニケーションは本来、思い通りにいかないもの。そのズレこそを面白がり、関係を深めるチャンスだと捉え直してみてください」と説いた。

10. 失敗を喜び、「一緒に」を体現する

二人組で声を掛け合う「1，2，3 ゲーム」や「ピンポンゲーム」では、失敗したときに「しまった！」と笑い合える空気が会場に広がった。「失敗した自分を責めるのではなく、『やっちまった！』と切り替えて次に進む。このしなやかさこそが、大人の大切なスキルである」。また、相手に対して「やってあげる」のではなく「自分も一緒に遊ぶ」という対等なエネルギーが通い合ったとき、会場のあちこちに本物の「こども時間」が流れるような笑顔が見られた。

図 3　ワークの様子

11. ワークのおわりに

最後は、共にワークを乗り越えたパートナー同士、清々しい拍手で締めくくられた。遊びを通じて、参加者は「寄り道」の豊かさと、不完全な自分をも包み込むユーモアの力を肌で感じることができた。クリニクラウンが病棟に届けているのは、単なる娯楽ではなく、どんな状況下でも「その人らしく在ること」を肯定する、温かな眼差しそのものなのである。

12. 結びに代えて：誰もが持つ「クラウンハート」

ワークショップの締めくくりに、熊谷氏は「逆転の発想」と「リフレーミング」の重要性を説いた。「5 ＋ 2 の答えは 7 だが、逆に『答えが 7 になる数式』を考えれば、その可能性は無限に広がる」という例えは、視点を変えることで世界の見え方が劇的に変わることを示している。

失敗を「おいしい」と捉え、短所を長所へと読み替え、相手の拒絶さえも「関わりたい気持ちの裏返し」と捉え直す。状況は変えられなくても、視点や見方を変えることで、自分の行動や相手との関わり方は変えられると熊谷氏は言う。

「クラウンは、弱さを肯定する存在です。完璧でなくてもいいという安心感を届け、立場や役割の境界線を軽やかに越えていく。人は完璧ではないからこそ、つながることができるのです」

最後に贈られた「自分の中にある『クラウンハート』を大切に」という言葉は、参加者一人ひとりの心に温かな灯をともした。多様性を認め合い、違いを面白がる。そんな成熟した社会への願いが込められた充実の勉強会となった。